

# 認知言語学で日本語の将来を見据える

Interview with Yohky Atakawa

**人**は、どうやって言葉を覚えるのか。スポーツの得手・不得手、物理の得意・不得意はあっても自分の最初の言葉である母語は、自然と使いこなせるようになる。荒川洋平氏は、基本的な認知能力と言語の関係を考える認知言語学の分野で、世界の言語の研究に勤しむ。

例えば、英語の「feel up」は「気分は上々」を意味する。その背景には、人が「上々」という概念にプラスの価値を見出していることがあるのではないだろうか。反対に、「下々」はマイナスのイメージで捉えがちである。つまり、「上と下」の価値付けに代表

されるように、多くの言語に共通な「表と裏」「前と後」「光と陰」などは、身体の経験・行動知に基づく意味合いが反映される場合が多い。認知言語学はそうした内容を研究領域とする。

「前方は大体どの言語でも未来ですし、後ろは過去です。比喩的に『先が見えない』という表現は諸言語にあります。そういう身体認知の価値付けがもし多くの言語に共通するとすれば、ダイレクトに言語教育に役立てられるはずですよ」

## 日本語教育に生きる 応用認知言語学

執筆者として参加した『英語多義ネットワーク辞典』（2007年刊）では、英語世界の研究成果を集大成としてまとめた。英語の重要多義語1427語を選定し、その多義の仕組みを含めた全貌の解明を目指した辞書だ。なぜ多義語が複数の意義を持つかを明らかにし、そこから見える英語圏の人

たちのものの見方を提示している。一例を挙げると、windowの項目では、まず「窓」という意味が示される。その後、「窓」は次々と展開され、「商店の陳列窓」「コンピュータ画面など」窓の形をしたもの、「駅・銀行の窓口」「世界・心の窓」「時間・機会の窓」と広がっていく。

こうした発想を外国語教育に役立てようとするのが、応用認知言語学だ。

「例えば日本語の『山』は単にほかの地面より高く盛り上がった場所だけでなく、仕事の山、借金の山、試験の山、映画の山場といった使われ方もする。なぜ『山』であって、『丘』ではないのか。おそらく人間は山と長く対峙して、その経験から乗り越えないといけないものと感じているのではないのでしょうか。そういう推論を立てて意味の広がりや辞書にしています」

著書『とりあえず日本語でもしも…あなたが外国人と「日本語」



あらかわ ようへい  
1984年立教大学文学部仏文科卒業、  
93年ニューヨーク大学教育学大学院修士、  
デューク大学助手、  
国際交流基金日本語国際センター専任講師を経て、  
99年より現職。  
専門はメタファー研究を中心とした  
認知言語学。

## 荒川洋平 准教授

留学生日本語教育センター・認知言語学

人は主観の世界に生きています。仮に、ここに階段があったとしよう。階段の上にいる人から見れば、

見下ろす先は「下り階段」。でもその逆は「上り階段」に他ならない。同じ階段でもどこから見ると、どのような捉えるかによって言葉が異なる。日本人が考える日本語と、外国人から見た日本語、というのと同じ関係性で

論じることができるとも思えない。

文・小玉進午 写真・高伸建次



これまで出版した日本語教育に関する本の数々。現在は仮想世界のメタファーに関する日本語論を執筆中。



研究道具一式が詰め込まれたかばん。これを手に、多くの国々を回った。

語で話す」としたら(2010年刊)は、言葉の源流を探りつつ、日本語教師としての経験をまとめて上梓した。世界100カ国以上、300万人を超える、外国人の日本語に、対して我々はどうあるべきか、「対外日本語コミュニケーション」の視点から解きほぐす。

## 発想の違いを 受け入れる寛容さ

「日本人は外国人の日本語に、あまり寛容とはいえません。『日本語には敬語や漢字といった独特な表現があり、使い方が難しい』と勝手に決めつけていることが、いびつな対外人コミュニケーションを形成する一つの要因です。変に外国人を子ども扱いするケースや、相手が日本語で話しているのに無理に英語で答えようとする

場合などです。あるいは外国人からの電話で『あなたの言うことが聞こえません。もっと大きい声で言ってください』と言われてムッとしたことはありませんか。でもこれは英語の『I can't hear you well. Please speak out!』という極めて普通の表現を日本語にしたにすぎないのです。失礼な意識は毛頭なく、ただ外国人の発想で話しているだけです。外国人の話す日本語に寛容になろう、私たちもある程度わかりやすく話をうというのがこの本の主旨です」

## 21世紀の日本語の 進むべき道を考える

現在、日本では「介護日本語」

が社会問題になっている。介護分野で働く外国人労働者の増加がその背景にある。「国際化する日本語」を考えた場合、例えば日本国内における「らスキ言葉」などよりもっと大きな問題に直面している。

「外語大に籍を置く身として、21世紀の日本が外国から好かれるだろうか、日本語や日本文化に興味のある

人をシャットダウンしてしまわないうだろうかという危惧がある。外国人を『ヨソ者』や『お客』と見るのではなく、おらかな気持ちで日本社会に受け入れる。そうすることで、この国はもっと暮らしやすく、かつ21世紀に日本人が生きる道も自ずと見えてくると感じています」

大学を卒業後、通訳者時代にチラシが縁で飛び込んだ日本語教師の世界。気がつけば20年の歳月が流れ、今や延べ1000人、36カ国の学生に日本語を教えた。

教室はいつも笑いにあふれ、質問が飛び交う。あるチェコ人の学生は「デザートベツバラ」って言葉、ロシアの田舎の言葉みたいで面白い!と話し、新鮮な毎日

に驚きを隠さない。ここ4年間、荒川氏は中学高校の先生を対象に、日本語教育を教える教師研修(REXプログラム)に携わっている。自治体の姉妹都市交流などで派遣される日本人教師に日本語教授法を伝授する

先生の先生、役だ。 「外国人相手に現場で教えるだけではなく、自分の経験を学校の先生に教える。自分の考えの整理にもなりますし、先生方もそれをも自分の学校に還元できる。奥行きと広がりのある仕事です」

今後とも認知言語学と国際的な広がりを持っていく日本語の将来を見据えていくだろう。

辞書ページの内容。window (窓) の語源、例文、多義語解説、wing (翼) の語源、例文、多義語解説。英語の重要多義語1427語を解説した「英語多義ネットワーク辞典」の例として「Window」や「Wing」の多義性を示している。